といへば、の和も七十をした人であるが、見るからに迚も元氣なおさんで、小達とよくれたりをいつたりしてゐた。

私がこのへ來て間もない或日、十數人の小達がので、トンチキといふにつてきやつきゃつとい[で]ゐるのを見た私は、よせばいのに、

「達はおはそちのけにトンチキばかりやつてゐるか」

といつたものだ。

そしたら、長い杖にをせて立つて見てゐた意地さうな一が、

「トンチキもですぞ。女びも三境に入ればですぢや」

といふのであつた。私はこつんに一を受けたであつたが、それが後でさんとつた。この和さんはのやうに、どうも業障が取れなくてる。今生でりを開くことなんかもうめた、などいつてゐる。もう七十三にもなつたからさういつてゐるのかもしれないが、が赤いのからすれば、或はが止められないためかも知れぬ。「どうも下がうてな」とをこぼすこともあるが、しかし決してをしたことがない。いつも朗らかで元氣だ。「十前日々無數」でのをしてゐるから、閻が一寸も怖くないのだらうといつたら、とてもにつてゐられた。

實さんたちは若い時にをへてけばその功の定金で後半生に多しだらをしても極生間ひなしと信じてゐるらしかつた。それかあらぬか京城附近のさんたちは、年は大おかみさんをしたりをつたりしてゐる。自分でやるばかりでなく、をかしぐ賈をんで平然たるものもある。「食無般若」の一は、えてゐるのだ。

これはあまり名あることではないだから一寸名前はするが、あるなどは、五十過ぎまでは行清で名を謳はれたのであるが、金持のある檀家の後家さんと一緒になつて、今では一の家になりすましてゐる。「主」とのさんたちからをいはれても平気で色事の話が出ると、のけた口をもぐもぐさせながら々よくしやべる、とても元気な人だ。

ところが、私は或日朝早くに出ると獨聖閣の前でしきりに合拜するものがあつた。はて今時殊なと近づいて見たら、これはまたどうしたことか、のさんがちやんと法にを正して、拜をしてゐる[で]はないか。しからばこの和さん、にも、羅睺羅者のやうな行家であつたか。下の生のためにわざわざの相をしてゐる[、]いはゆる内菩行外現是聲聞ではないだろうかと、そのをのぞき込まざるを得なかつた。

しかし何といつても、寂の行者こそ天寺一の知でなければならないと私は心してゐる。私はこの和さんのも名も知らない。をへてゐるところをぢかに見たのが二回、墻のできいたのが數回、とつて話をしたのはたつたの一回に過ぎないが[、]どことなく煩かられた行者のやうなじを與へるのであつた。年は六十三、家もなく、子もなく、出家四十五年、で通したといふ人だ。のにの袈裟をかけて太鼓をきながらおをへてゐるところは、實に寂そのもののやうで一のをも止めて神々しさである。建のにはの力がこもつてゐるが、このさんのはその境を通りしたのやうであつた。むらくは、このさん、平ので人につき合ふときの儀は建よりもずつと落ちるやうにはれた。（『京城日報』1940年5月18日）